

# 日本株を見直そう（その1）

## ～2万円の壁～

### ポイント① 2万円接近で売る個人、買う海外勢

ここ数年の日本株式市場の売買データを振り返りますと、日経平均株価が2万円に近付くと個人投資家の売り越しが目立つように見えます。足元5月では2万円を目前にして4週累計（約1ヵ月）で1兆円超の売り越しになっていますし、昨年暮れ頃にも同1.5兆円ペースの売り越し、そして、2015年前半に2万円超えに向けて上昇していた頃にも、同1兆円前後の売り越しが続きました。

海外勢の買い越しで上がっても、国内個人の売り越しで2万円に蓋がかげざられたような展開になっています。

### ポイント② 日経平均2万円の「壁」

1990年代のバブル崩壊以降の株式市場を振り返りますと、1992年夏に日経平均株価が14,000円台の安値に沈んだ後、2000年頃までは何度か2万円を奪回したものの、すぐに裏切られ、2007年夏の戻り高値では2万円すら届かないなど、戻り天井が徐々に下がっていました。

2012年終盤に始まったアベノミクス相場では、2015年に15年ぶりに2万円を奪回し、それまでの右肩下がりトレンドからは脱却したものの、すぐに2万円割れに沈んだことで、個人投資家には2万円は「壁」のように感じられているのかもしれませんが、何度も裏切られた結果、「2万円は売り」という感覚が染みついた可能性があるように思われます。

### ポイント③ 日本企業の業績は史上最高水準

ところで、日本企業の業績動向を振り返りますと、TOPIX（東証株価指数）ベースの経常利益で見ると、1990年代のバブル崩壊期はだいたい10兆円か、年度によっては数兆円規模しか利益がありませんでした。一方、2006年度には45兆円と4倍以上になり、2017年度は60兆円程度が予想されています。

同じ日経平均株価2万円といっても、1990年代と現状では企業収益に6倍もの開きがあります。2万円でも何度も跳ね返されたことは確かな事実ではありますが、過去と現状では状況が大きく異なり、今後は「2万円の壁」を突き抜け、上放れる可能性があると考えています。

次回に続きます。

図1：投資部門別売買状況（個人と海外）

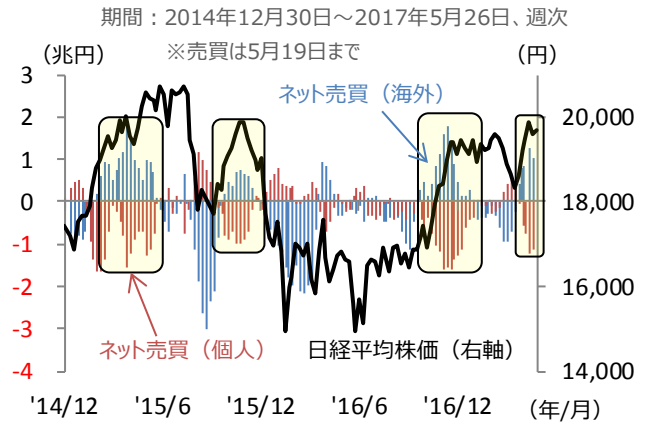


図2：2万円が節目となってきた日経平均株価

期間：1991年12月30日～2017年5月26日、週次

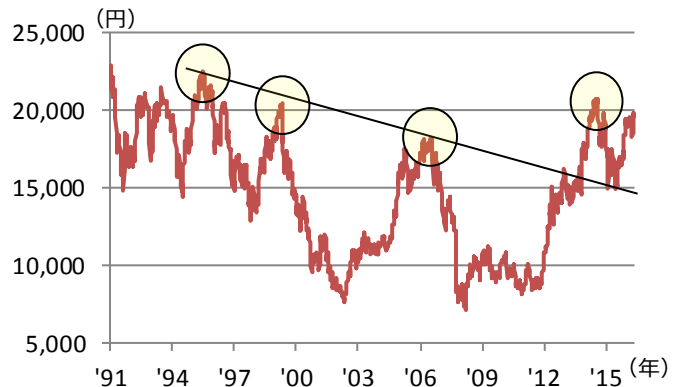
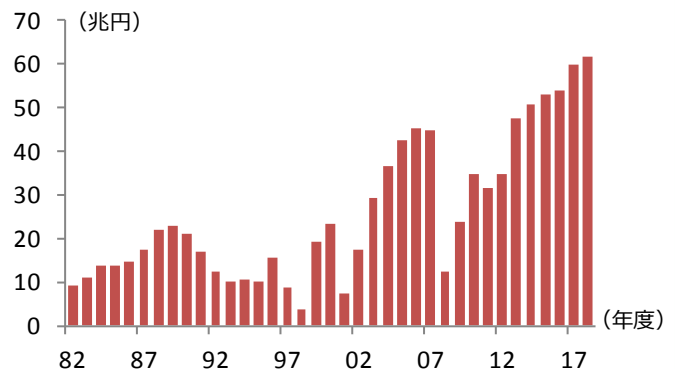


図3：日本企業の経常利益

期間：1982年度～2018年度、年度



（注）TOPIXベースの経常利益、17、18年度は野村證券と東洋経済新報社による予想（2017年5月26日時点）。

（出所）野村證券、Auroraデータより野村アセットマネジメント作成

当資料は、投資環境に関する参考情報の提供を目的として野村アセットマネジメントが作成したご参考資料です。投資勧誘を目的とした資料ではありません。当資料は市場全般の推奨や証券市場等の動向の上昇または下落を示唆するものではありません。当資料は信頼できると考えられる情報に基づいて作成しておりますが、情報の正確性、完全性を保証するものではありません。当資料に示された意見等は、当資料作成日現在の当社の見解であり、事前の連絡なしに変更される事があります。なお、当資料中のいかなる内容も将来の投資収益を示唆しない保証するものではありません。投資に関する決定は、お客様ご自身でご判断なさるようお願いいたします。投資信託のお申込みにあたっては、販売会社よりお渡します投資信託説明書（交付目論見書）の内容を必ずご確認のうえ、ご自身でご判断ください。